

## 紹介『特選!! 米朝落語全集』(ビデオ版)

山本 卓

わたくしなどが、いまさら三代目桂米朝師を紹介するなど僭越極まりないが、本誌の依頼黙しがたく輦覺覚悟であえて略記する。

戦後、危機的状況にあった上方落語を復活して、のちの上方落語ブームにまで牽引した四天王<sup>(注)</sup>の内の中心的人物が、三代目桂米朝であることはよく知られている。周知のように人間国宝でもある。

米朝師は、昭和41年刊『楽我記』をはじめとして、著書多数がある。『上方落語ノート』(青蛙房)や『米朝ばなし—上方落語地図』(講談社文庫)などの研究書とも称すべきものや、『落語と私』(文春文庫)など、読者を落語に、また桂米朝というその人に、惹きつけるすばらしい啓蒙書などもある。近年、岩波書店より『桂米朝集成』(全4巻)が編纂刊行されたことは慶賀に堪えない。

また、米朝師の落語そのものは、立風書房『米朝上方落語選』(正統昭和45・47年刊)・創元社『桂米朝落語全集』(全7巻・昭和55~57年刊)・ちくま文庫『上方落語 桂米朝コレクション』(全8巻・平成14~15年刊)をはじめとして、活字化されている。これらの全集によりその全貌は容易に知れるのであるが、隔靴搔痒の感は否めない。なぜなら落語は話芸であり、やはり聴くに限るのである。

そこで生まれたのが「桂米朝上方落語大全集」である。1970年代に桂米朝師の各地での公演を収録した上方落語100演目が2枚組みアナログレコード23タイトルとして、1973年~1978年の5年間にわたりリリースされた

(のちにはカセットテープ化・CD化もなされた)。米朝師が四十代後半から五十代の頃で、壮年期の名演ばかりである。ここに至って米朝ファンや落語愛好者はようやく渴を癒すことが出来ることとなった。

だがしかし、落語は音声のみで伝えているわけではない。ある面では、一人芝居なのである。噺家はひとりで何人もの役を演じる。小道具は、扇子と手拭いのみ。たったそれだけでひとつの舞台にする。その演出全体の記録・再現は、映像によらなければいかんともしがたい。そのような点から愛好者が鶴首していたのが、ビデオ版『特選!! 米朝落語全集』(東芝EMI)である。その細目は

### 第一期

- 第一集 帯久 足上り
- 第二集 猫の忠信 馬の田楽
- 第三集 不動坊 たちぎれ線香
- 第四集 天狗裁き はてなの茶碗
- 第五集 らくだ 京の茶漬
- 第六集 五光 天狗さし
- 第七集 百年目 焼き塩
- 第八集 愛宕山 矢橋船
- 第九集 本能寺 くしゃみ講釈
- 第十集 地獄八景亡者戯

### 第二期

- 第十一集 宿屋仇 壺算
- 第十二集 算段の平兵衛 近江八景
- 第十三集 住吉駕籠 けんげしゃ茶屋
- 第十四集 骨釣り まめだ
- 第十五集 景清 鯉船

- 第十六集 三枚起請 持参金  
第十七集 饅頭こわい 稲荷俵  
第十八集 親子茶屋 つる  
第十九集 植木屋娘 軽業  
第二十集 風の神送り どうらんの幸助

(外国語教育研究機構所蔵は以上)

第五集「京の茶漬」のおいしそうな茶漬けの食べ方、第9集「くしゃみ講釈」で、止まらぬくしゃみをおして難波戦記を必死で語る講釈師の演じ方や、第十集「地獄八景亡者戯」の閻魔さんの顔真似?、あるいは第二集「猫の忠信」第九集「本能寺」など芝居話などなど、ビデオならではの見事な演技を味わうことはできない。これらの映像によって、三代目桂米朝師の「型」はここに定着し、未来

永劫生き続けることとなった。米朝師六十代半ばから後半の、映像を伴った公演の記録である。昭和のレコード盤に横溢する壮気や勢いにはやや欠けるかも知れない。しかし、老練・老熟ともいうべき、米朝師が一生をかけて到達された至高の境地が示されているのである。21世紀に伝えるべき、名人藝といえよう。

なお、本全集は第三期(第二十一集～第三十集)も販売されていることを申し添えておく。

(注) 六代目笑福亭松鶴・三代目桂米朝・三代目桂春団治・三代目桂文枝